

水産庁：水産多面的機能発揮対策事業

静岡県の水産多面的機能発揮活動

令和4年度版



食害生物であるガンガゼの除去（沼津市久連地区）

静岡県水産多面的機能発揮対策協議会

令和5年3月

—— 漁業漁村における多面的機能とは ——

漁業生産活動によって生じる漁業への直接的効果以外の地域経済への寄与、雇用の拡大、海の環境保全などの間接的な効果です。

特に、地球温暖化の防止や海洋生物の保護、水質浄化機能など、豊かな海を育む機能は、漁業漁村の持つ多面的機能のうち最も大切な機能と考えられます。

本県では、下記の4団体が市民や企業、NPOなどと協力して令和3年度から7年度までの5ヶ年間、藻場やサンゴ礁の保全に取り組み、これらの活動を通じて、地域水産業の再生と漁村の活性化を図ることになりました。

CONTENTS

■ 榛南磯焼け対策活動協議会 代表 藪田 国之	1
榛南地域では、サガラメやカジメの群落が増加しており、その復活を目指します。	
■ 南伊豆伊浜藻場保全協議会 代表 高野 譲	3
伊豆地域では、カジメやアラメなど大型海藻類が枯死する現象が見られ、磯焼け対策が急務となっています。	
■ 伊豆FNY活動組織 代表 石川 憲一	5
伊豆半島の南伊豆地区では、人為的な環境汚染などの影響を受けてサンゴ群落が増加しており、サンゴ礁の環境保全を目指します。	
■ 北限域（内浦湾）の造礁サンゴ群落保全会 代表 土屋 孝次	7
駿河湾奥の内浦湾では、造礁サンゴ（エダミドリイシ）の北限域となっており、群落の保全が課題となっています。	
■ サンゴと地球環境 ～生物多様性を支える基盤～	9
東海大学海洋学部 准教授 中村 雅子	

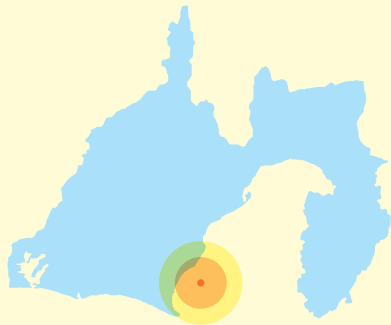
● 榛南磯焼け対策活動協議会

代表 藪田 国之

〒437-1623 御前崎市港 6131 南駿河湾漁業協同組合 tel.0548-63-3111

主な構成員（人数）：漁業者（53名）、漁業者※以外（7名） 計 60名

関係市町：御前崎市・牧之原市・吉田町 ※南駿河湾漁協職員・ダイバー



●活動地域

当活動協議会は、静岡県御前崎市・牧之原市・吉田町の2市1町に及ぶ沿岸海域で活動しています。磯焼け以前は、サガラメ・カジメによる約8,000ヘクタールの藻場が形成されていて、日本でも有数の藻場として知られていました。

●協定面積 48.2ha

対象種の紹介

当地域の磯焼けは、平成初め頃に部分的に見られる程度でしたが、その後は急速に藻場の衰退が進み、数年後には海域全ての藻場が消滅してしまいました。それにより特産であったサガラメ（牧之原市相良が名称の由来）の採藻漁業も途絶えと共にアワビ等の漁獲量も激減するなど、生態系と水産資源に与える藻場の重要性を改めて実感しました。



■藻食性魚類（アワビ）による食害



■復活したカジメ藻場に群れる魚

対象種の分布・生育状況

対象とするサガラメ・カジメ藻場は榛南沿岸域の岩場にかけて広く分布し、アワビ・サザエを始め磯根漁業の主要漁場であり、藻場を形成するサガラメは古くからこの地域の特産品としても食されて来ました。現在は、相良沖を中心にカジメ群落が少しずつ回復する状況です。

保全活動の必要性

藻場は多くの水生生物の生活を支え、産卵や幼稚仔魚の成育の場になって生物多様性を維持しているほか、水質浄化にも大きな役割を果たしています。最近では、陸上の森林よりも多く二酸化炭素を貯留する役割についても注目されています。一旦ゼロになってしまった藻場も徐々に回復してきていますが、さらなる生物多様性の向上を目指し、引き続き保全活動を実施する必要があります。

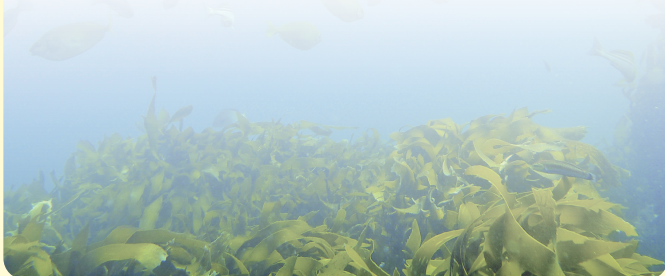
これまでの活動成果

種苗投入、母藻設置などの活動を続けた結果、870haものカジメ藻場が確認されました。ここ数年台風の被害も出なかったことも、順調に藻場が拡大した要因と推測されます。それに伴いアワビやサザエといった磯根資源の漁獲量も増加してきました。

今後の活動指針

●保全活動の目標

相良地区のカジメ藻場は10年前には想定できなかった回復を見せています。その一方でかつての特産品であったサガラメ藻場が依然として確認されていません。今後はサガラメ藻場復活に向けた活動を行います。



【活動計画】

1 母藻の設置

- ・繊維状の基質（シールート）を用いてサガラメ移植基を作成する。
- ・相良沖に作成した移植基を設置する。

2 種苗の投入

- ・御前崎港周辺・御前崎沖にカジメ種苗、相良沖にサガラメ種苗の投入を行う。

3 モニタリング

- ・各活動区域において、潜水調査による定点観測を行い、活動区域ごとの平均被度を算出する。

●令和4年度の取組状況

【実績】

1 母藻の設置



■サガラメ移植基



■ダイバーによる設置作業



■海底に設置した移植基

2 種苗の投入



■海岸へ漂着したカジメ



■子嚢斑が出ている個体をスポアバッグに充填



■活動区域に投入

3 モニタリング



■藻食性魚類による食害が見られるカジメ藻場



■藻場保全活動により回復したカジメ藻場

【これからの課題】

県による調査では、継続的な対策によるカジメ群落の復活が確認できています。しかしながら、8000haといわれた往年の藻場復活には程遠い状況です。カジメ藻場の状況

をモニタリング等で確認しつつ、引き続き地元特産品であったサガラメ藻場の復活への取り組みにも力を入れて行っていきます。

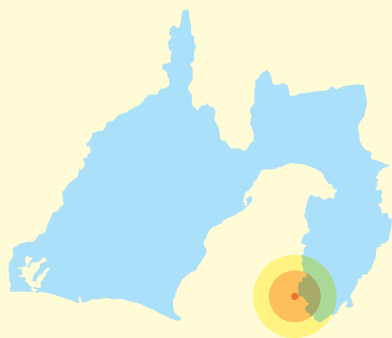
●南伊豆伊浜藻場保全協議会

代表 高野 譲

〒415-0153 賀茂郡南伊豆町手石 877-17 tel.0558-62-2804

主な構成員（人数）：漁業者 47 名、漁業者以外 23 名 計 70 名

関係市町：南伊豆町 ※静岡県漁港建設協会・(株)鉄組潜水工業所



●活動地域

2022年現在、伊浜地区は登録漁船25隻、漁獲量1.2t、生産高5百万円の小さな漁村です。周辺は風光明媚な景勝地で最盛期には40軒ほどの民宿がありましたが、現在は1軒のみとなり高齢化が進んだ限界集落となっています。主力魚種はイセエビ、サザエ、アワビ、フナですが、かつて周辺に密生していたカジメが磯焼けにより消滅したことに伴い貝類の漁獲が激減しています。

●協定面積 6ha

対象種の紹介

カジメの特徴：コンブ目、水深2～10mの岩礁の上に群落を形成する。食用ではなく主にアルギン酸の原料となります。アワビなどの餌、魚類の生育の場となり沿岸漁業や海の環境上も重要です。



■下流沖のカジメ群落(母藻の供給源)



■伊浜漁港内のカジメ群落(防波堤壁面)

対象種の分布・生育状況

伊浜地区のカジメは漁港内に生育するのみで漁港の外には全く見られません。伊浜沖の天然礁(点石帯)は丸坊主ではなく小型藻類がところどころ繁茂する他、近年はサンゴも見られます。自然条件としては夏場の高水温が冬まで残り高水温が続いています。加えて港外は遮蔽物が少なく台風や冬季風浪の波を直接受けるため生育は厳しい状況です。

保全活動の必要性

伊浜地区はカジメの分布の南限に近く、移植を1971年頃から数度行う事により、粗密を繰り返してきたが、今世紀初頭からの磯焼けによりカジメはほぼ壊滅し現在に至っています。漁業者が高齢化し後継者もなくカジメ場の保全が困難なため、地域の力を結集してカジメ場の保全の必要性がります。

これまでの活動成果

これまで伊浜港内では一年中カジメが繁茂していましたが、今年度の高水温によりまばらな状態となり、毎年港内の船底に密生する幼体がまったくない異常な状態となりました。そこで伊豆東海岸で幼体が繁茂している小稲漁港の漁業者に協議したところ採取が許可されました。このように今までにない漁業者間の協力体制が出来きました。

今後の活動指針

●保全活動の目標

伊浜地先のカジメ群落の保全のため簡易で安全な手法により地域の関係する誰もが支援できるような体制づくりを目標とします。



【活動計画】

1 種苗生産

・港内及び他港の船底等に繁茂する幼体を採取し、石に接着し港内に設置します。一部は保護籠に入れ食害から保護します。また大きなコンクリート塊を港内投入し着生礁とします。

2 種苗設置

・港内で育成し活着した幼体及び新たに接着した幼体を、港内、港外、宇留井島周辺に投入します。一部は水中ボンブで岩に接着し安定させます。

3 母藻投入

・下流漁港周辺で台風により打ち上げられたカジメの子囊班を確認し、採取したものを港内、港外、宇留井島にスポアバックに入れ投入します。

4 食害生物の除去

・刺し網によりブダイ、ニザダイ、メジナ、タカノハダイなどの食害魚を駆除します。

5 モニタリング

・港内に1点、港外に9点、宇留井島に1点合計11点の観測基点を設け、景観被度を計測しています。

●令和4年度の実績

【実績】

1 種苗生産



■小稲漁港のカジメ繁茂状況



■幼体を石に接着する



■港内の保護籠内



■着生礁としてコンクリート塊の投入

2 種苗設置



■設置した様子(宇留井島)

3 母藻投入 (R3の状況)



■今年度は伊豆半島全域で繁殖が少なく母藻の採取が困難となったため断念した。

4 食害生物の除去



■駆除魚種の確認

5 モニタリング



■モニタリング

【これからの課題】

1. 港外と宇留井島は毎年秋になると設置したカジメは全滅する。原因は高水温、食害魚、波浪が複合的に作用していると思われる。
2. 今年度の特に夏の水温が高く、港内のカジメもほとんどなくなり、毎年船底に繁茂する幼体もないため、近隣の漁港に協力を求めたところ幼体採取の許可がとれた、このような協力をもっと広域的かつ永年続けられるような体制を築きたい。
3. カジメは高水温に弱いため、他の大型藻類にも目を向けて伊浜に適した種類を模索する。

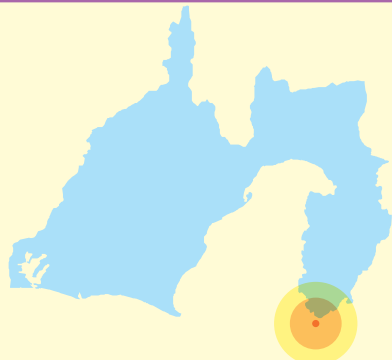
◎伊豆FNY活動組織

代表 石川 憲一

〒415-0324 静岡県賀茂郡南伊豆町上小野 469 tel 090-5858-5486

主な構成員（人数）：漁業者 65 名、漁業者※以外 53 名 計 118 名

関係市町：南伊豆町 ※伊豆漁協南伊豆支所・NPO法人伊豆未来塾・
ダイビングインストラクター・シーカヤックインストラクター



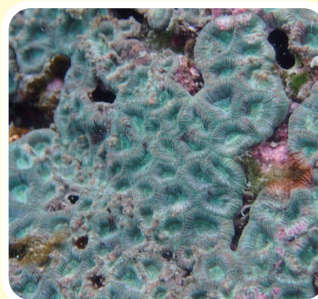
●活動地域

FNY活動組織は伊豆半島の最南端南伊豆町を拠点として活動を行っています。南伊豆町の海岸線は5.7kmと大変長く全ての地域での活動は難しいので、特にサンゴの生息が認められる地域や浮遊ゴミの多い地域を選んで活動を行っています。

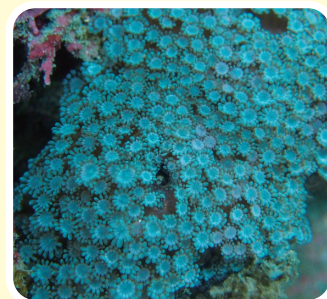
●協定面積 10ha

対象種の紹介

伊豆半島南側は変化に富んだ複雑な地形をなして、黒潮の通り道になっていることから、日本北限のサンゴ20数種類が生息しています。種類によっては大きな群落をなしている事を確認しています。



■キクメイシ



■ニホンアワサンゴ

対象種の分布・生育状況

サンゴの保全活動を行っている中木地区では多種・多数のサンゴが確認されています。サンゴの生育状況は良好ですが、近年台風の大型化や高潮によっての被害が心配されています。新たにサンゴが確認された妻良地区も今年度よりサンゴの保全活動を行っています。

保全活動の必要性

特に、サンゴが多く確認出来る中木地域のヒリゾ浜周辺では、近年秘境の浜として大勢の観光客が訪れています。ヒリゾ浜に渡る観光客にサンゴの保護に関するパンフレットを配って、サンゴの保護の重要性をうたっています。

これまでの活動成果

サンゴの生息地を隠すのではなく、場所を明らかにした上で、保護の必要性や保護の方法を説明することで来訪者のサンゴの保護に対する理解度が上がってきました。また、海洋汚染等の原因となる漂流・漂着物、堆積物の処理を継続することで、海環境保全の意識が高まってきました。



今後の活動指針

●保全活動の目標

南伊豆地域の海岸や海中から人為的に捨てられたゴミが無くなるように海の清掃活動を続けていきます。また、サンゴの生息地を定期的に清掃しサンゴの貴重さを地域や来訪者にアピールしサンゴの保護の方法や必要性の理解を深めていきます。

最近回収量が増えているペットボトルなどマイクプラスチックなどのゴミの量の把握、どこから来たのかなどの解析にも力を入れていきたいと思えます。



【活動計画】

1

サンゴ礁の保全
中木地区

・ダイバーによるサンゴの生息調査を行う。
海中及び海岸のゴミ及び有害生物を除去する。

2

海洋汚染物等の除去
小稲・伊浜・手石地区

・6月に手石地区の海岸清掃を、11月に手石地区（小稲・下流）の海中清掃を行いました。

3

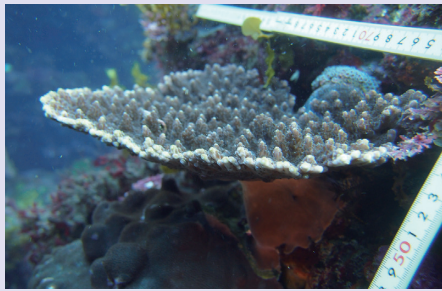
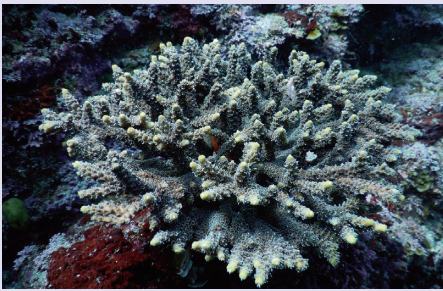
モニタリング

・サンゴの生育状況や増減の確認を行う。
・清掃活動を行った地域の海中生物の増加量や海岸・海中ゴミの堆積状況の確認を行う。

●令和4年度の実績

【実績】

1 サンゴ礁の保全



2 海洋汚染物等の除去



■回収された海岸ゴミ

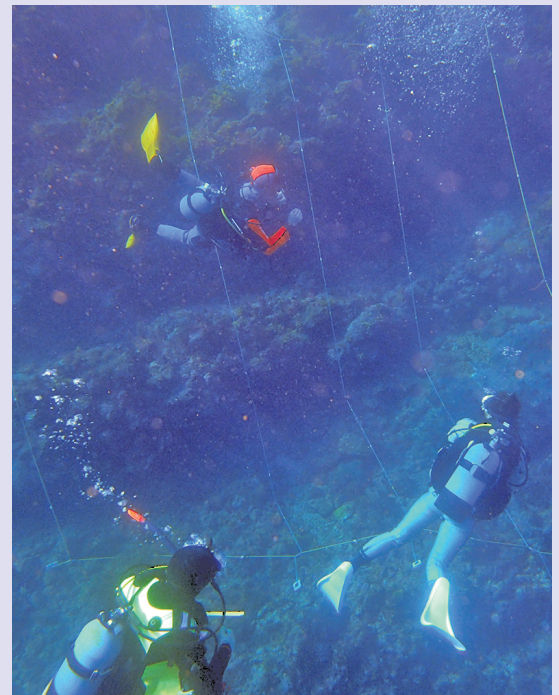


■海中ゴミの状況



■海岸ゴミの回収作業

3 モニタリング



■コドラート（5m×5m）を使用してサンゴの生息状況記録

【これからの課題】

南伊豆町中木地域のサンゴ群落は本州の北限のサンゴとも言われ大変貴重なものです。しかし20数年前に比べると明らかにサンゴの個体数が減少しています。当時から継続してモニタリングした資料はなく、サンゴの成長が遅いため、回復傾向の判断が難しくなっています。できればこの先10年単位の継続したモニタリングが必要だと思われます。

また浮遊ゴミの回収に関しては明らかにプラスチックゴミや回収が難しい

マイクロプラスチック等が増えています。これらのゴミの回収を行うとともに出さない工夫など、一般向けの講座の開催なども行う必要があると考えます。

南伊豆地区の海中ゴミは明らかに減少していますが、地元由来ではない浮遊ゴミ（プラスチック）が明らかに増えています。これらのゴミの清掃活動はもちろんですがどこからこのゴミが浮遊してきたのか調査も必要と考えます。

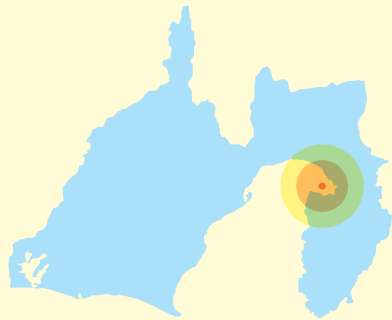
◎北限域（内浦湾）の造礁サンゴ群落保全会

代表 土屋 孝次

〒410-0223 沼津市内浦三津 88-34 内浦漁業協同組合 tel.055-943-2316

主な構成員（人数）：漁業者 2 名、漁業者※以外 16 名 計 18 名

関係市町：沼津市 ※内浦漁業協同組合（&平沢マリンセンター）・東海大学・NPO 法人しおさい 21
伊豆三津シーパラダイス・平沢海浜利用委員会・（同）游渚



●活動地域

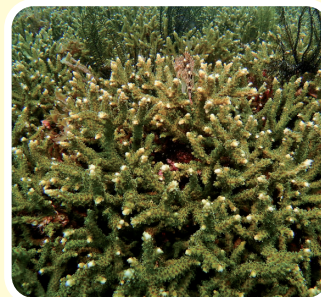
駿河湾奥北東部に位置する内浦湾には、数十種の造礁性イシサンゴが生息し、砂礫地にはエダミドリイシがパッチを形成しています。冬場にはヒロメヤフクロノリなどの大型海藻が繁茂し、特異な景観を呈します。

●協定面積 8ha

対象種の紹介

内浦湾のサンゴ群落は、主に造礁性イシサンゴのエダミドリイシ *Acropora pruinosa* により形成されています。本種は、九州から千葉県館山まで分布する温帯域に特有なサンゴで、樹枝状の群体がパッチ状に広がり、周辺の岩礁域や海草藻場とは異なる生物群落を形成しています。

また、対象種のエダミドリイシは、環境省レッドリスト(2017)で絶滅危惧Ⅱ類(VU)に指定されています。



■エダミドリイシ



■内浦湾のエダミドリイシ群落

対象種の分布・生育状況

内浦湾のエダミドリイシ群落は、90年代初頭には5,000 m²ほどの広さをもち分布北限域最大とされていましたが、現在は小群落が点在する状態で、総面積は発見当時の2.3%ほどに縮小しています。縮小の主な原因は1996年冬の低水温とガンガゼ類による食害です。これに加えて、冬場には大型藻類が繁茂し、サンゴを覆い尽くすことでサンゴの成長を妨げます。

保全活動の必要性

内浦湾のエダミドリイシ群落は、他生物に住処や隠れ家を提供するとともに、食物連鎖における一次生産者としての役割も担う生態系の基盤生物であり、その保全が不可欠です。また、内浦湾のエダミドリイシ群落は、砂地というサンゴにとっては特異な環境に生息するため、生態学的にも貴重な存在です。

これまでの活動成果

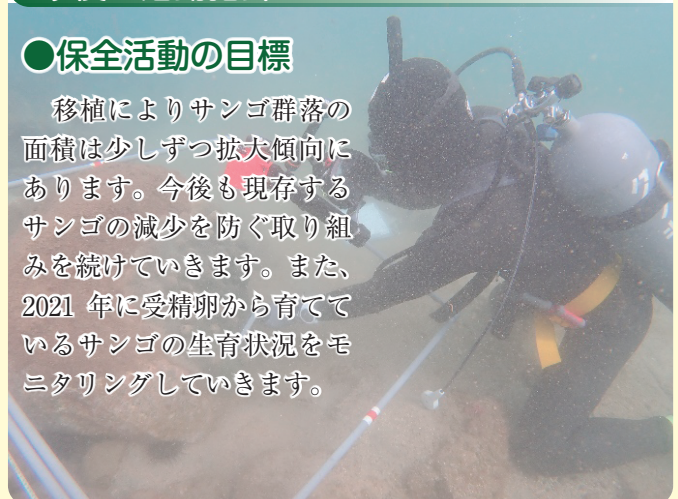
ガンガゼや大型藻類をエダミドリイシ群落上から除去することで、既存の群落を維持しています。また、ロープ養殖法によって養殖したエダミドリイシ群体を新たに移植することで、群落面積の拡大を図ってきました。



今後の活動指針

●保全活動の目標

移植によりサンゴ群落の面積は少しずつ拡大傾向にあります。今後も現存するサンゴの減少を防ぐ取り組みを続けていきます。また、2021年に受精卵から育てているサンゴの生育状況をモニタリングしていきます。



【活動計画】

1 サンゴの種苗生産

・ロープや基盤による養殖を中心に、有性生殖による種苗生産の実施

2 サンゴの移植

・種苗生産により成長したサンゴを協定面積内に移植する。

3 食害生物の除去

・藻類や棘皮動物などサンゴ及び移植サンゴに害をなす生物を移植実施区域及び周辺のサンゴ礫地を含む地域から除去する。

4 モニタリング

・現存するサンゴ群落及び周辺の着生可能な範囲を目視と航空写真、面積算出ソフトを用いて算定する。

●令和4年度の実績

【実績】

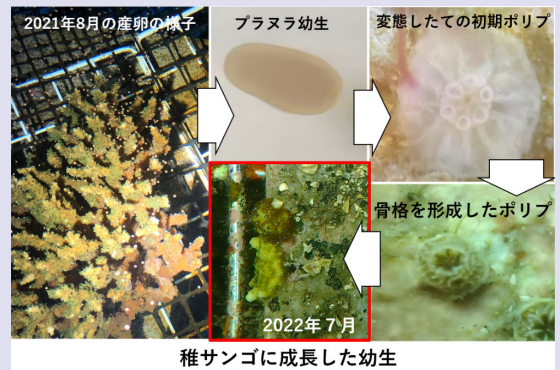
1 サンゴの種苗生産



■養殖基盤へのサンゴ片の取り付け



■養殖基盤上で大きく成長したサンゴ



稚サンゴに成長した幼生

2 サンゴの移植



■移植前の状況



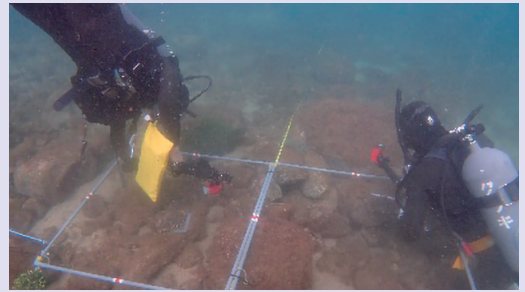
■種苗生産によって成長したサンゴの運搬

3 食害生物の除去



■ガンガゼの除去

4 食害生物の除去



■平沢地区でのベルトトランセクト調査



■種苗生産によって成長したサンゴの移植



■移植後の状況

【これからの課題】

人員不足が深刻な課題となっており、地域が中心となって保全していく仕組みづくりを模索していくべき時期にあると考えます。そのために、さまざまな形でサンゴの重要性を

知ってもらおう努力を続けていきます。同時に、今後も可能な限り定期的なモニタリング活動と現存するサンゴに負担の少ない種苗生産及び移植活動を実施していきます。

◎サンゴと地球環境

～生物多様性を支える基盤～

近年、気候変動や環境保全の話題とともに「サンゴ」という言葉を良く目にするようになりました。例えば、「サンゴが大規模に白化」「サンゴの○%が死滅」「サンゴ移植」などの言葉を見聞きした覚えはありませんか？

ここでは、サンゴについて「サンゴとは何か?」「サンゴの環境での役割とは何か?」「サンゴはどういった問題に直面しているのか?」「サンゴは静岡県でもみられるのか?」などについて紹介していきます。また、最後に「サンゴを守るために何ができるのか?」についても少しふれたいと思います。

サンゴとは何か？

サンゴとは、クラゲやイソギンチャクなどに近い刺胞(しほう)という毒針をもつ動物です。他の動物同様に、餌を食べ、卵を産みます。



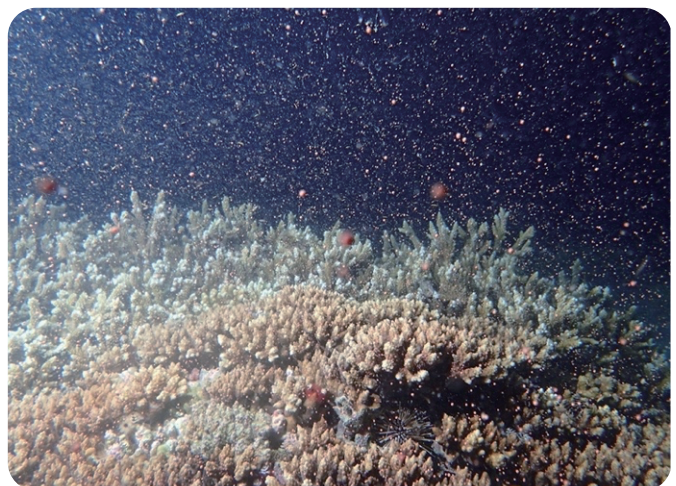
ポリプの写真(触手内に茶色く見えるのが褐虫藻)

サンゴの中で、沖縄などの熱帯・亜熱帯域にみられるサンゴ礁という地形を形作っているサンゴを「造礁サンゴ」と呼びます。造礁サンゴは、炭酸カルシウムの骨格をもち、死ぬと、硬い骨格だけが残ります。そういった死んだサンゴの骨格、貝殻、ウニの外骨格などが数千年という長い年月をかけて積み重なってできる地形がサンゴ礁です。つまり、『サンゴは動物、サンゴ礁は地形』を意味しています。

造礁サンゴは、褐虫藻(かっちゅうそう)という藻類を体内に共生させています。褐虫藻はサンゴの体内で光合成を行います。造礁サンゴは、褐虫藻が光合成で作出した有機物をエネルギーの一部としています。このような造礁サンゴの中には、サンゴ礁が形成されないような温帯域などに生息するものもいます。このため、近年、サンゴの呼び方として、造礁サンゴだけでなく、「有藻性イシサンゴ類」という呼び方を使うことも多くなっています。造礁サンゴの多くは有藻性イシサンゴ類に属しますが、造礁サンゴにはイシサンゴ以外の分類群も含まれます。

サンゴ礁の海から温帯の海まで広くみられるサンゴの多くは、イソギンチャクのような形をしたポリプがたくさん集まって個を作る群体性の動物です。また、サンゴの多くは、サンゴ礁や岩礁などの硬い海底基盤に固着しているため、生息環境が大きく変わっても、逃げるできません。

これらのサンゴは年に1回～数回、卵や幼生を産みます。サンゴの繁殖様式は大別すると「放卵放精(ほうらんほうせい)型」と「幼生保育(ようせいほいく)型」に分けられます。放卵放精型のサンゴの多くでは、年に1度、卵と精子を海中に放出し、受精が海中で起こります。皆さんが海の中で、もしくは映像などで「サンゴの一斉産卵」としてみているものは、放卵放精型のサンゴの産卵シーンです。放卵放精型のサンゴの卵と精子の放出方法は、卵と精子をバンドルと呼ばれる1つの塊にして放出する方法と、卵と精子を別々に放出する方法、卵

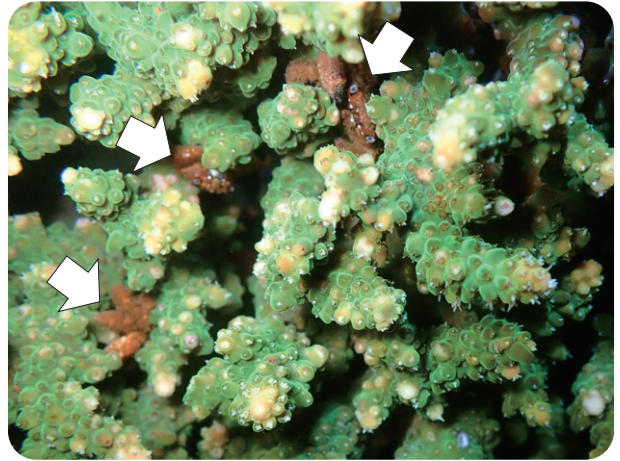


放卵放精型のサンゴの産卵シーン@高知

に見せかけた偽卵とともに精子を放出する方法など様々です。幼生保育型のサンゴは、体内で受精を行い、幼生を放出します。放卵放精型と異なり、年に数回から12回、幼生の放出を行うことが知られています。固着性であるサンゴにとって、幼生の時期が海流によって他の場所に移動できる唯一の期間になります。

サンゴの環境での役割とは何か？

サンゴは、海洋生物種の約4分の1が生息するといわれる種多様性の高いサンゴ礁生態系を支えています。サンゴは他の生物と様々な関係を築いています。具体的には、サンゴは他の生物にとって、隠れ家や棲み家となり、餌となり、また、足場となります。サンゴの形は、枝状やテーブル状、指状、塊状、被覆状、葉状などのように立体的で複雑です。例えば、枝状のサンゴの枝と枝の間は、小さな魚類の隠れ家になります。また、サンゴは褐虫藻の光合成から得た有機物の一部を粘液という形で体外に排出しています。この粘液はサンゴ自身を太陽の強い光や堆積物などから守るといった役割をもつ一方で、サンゴ礁に棲む生物の餌になります。サンゴの枝の隙間に棲むサンゴガニやサンゴテッポウエビなどははさみを使い、サンゴから直接、粘液をこそげとって餌とします。その他にも、サンゴを直接食べる生物がいます。オニヒトデやサンゴ食巻貝などが有名です。また、塊状のサンゴなどに歯形が残っている様子がしばしばみられます。犯人はブダイやニザダイなどの魚類です。さらに、サンゴの死んだ骨格に付着したり、穴をあけて棲んだりサンゴの利用方法は様々です。

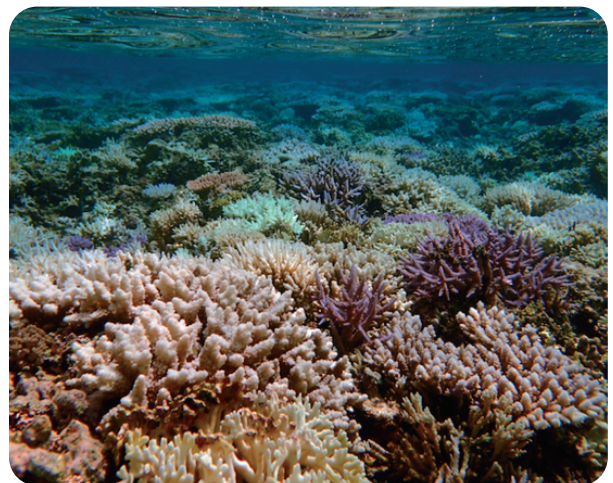


サンゴに棲むサンゴガニ類
(矢印で示したのがサンゴガニ)

サンゴは海をきれいにすると言われます。サンゴ礁の海は透明です。これは、水中にプランクトンや水を濁らせるような物質などが多く浮遊していないためです。植物プランクトンは栄養塩と呼ばれる窒素やリンの化合物を栄養源としています。サンゴに共生する褐虫藻は、光合成をする過程でそれらの栄養塩類を利用し、吸収します。他に、サンゴが体外に排出する粘液は、餌となるだけでなく、海中の浮遊する物質を絡めとり、沈下させる役割も担っています。ところで、サンゴは二酸化炭素の吸収源でしょうか？現在も評価が分かれる難しい問題です。

サンゴはどういった問題に直面しているのか？

近年、サンゴは減少しつつあります。その要因は、水温上昇や台風、食害生物の大発生、沿岸開発や乱獲など様々です。中でも、高水温による大規模なサンゴの白化現象では、その後にサンゴの大量死が観察されることが多くあります。サンゴの白化現象とは、何らかの理由で、サンゴの体内に共生する褐虫藻の数が少なくなり、サンゴが白く見える現象です。白化したサンゴは褐虫藻から十分なエネルギーを得ることができず、白化した状態が長く続くと死んでしまいます。白化の理由は、高温、低温、強光など様々です。



白化したサンゴ@網取湾

現在、高温に起因する大規模な白化現象が頻

繁に起こっています。日本沿岸では、2016年と2022年の夏季に大規模な白化現象を経験しました。日本の海域で唯一の自然環境保全地域に指定されている網取湾では、2016年の大規模な白化現象によって、サンゴの量が64.7%も減少したと報告されています。また、石垣島と西表島の間に位置する石西礁湖で、2022年に平均で92.8%のサンゴが白化したことが環境省の調査で明らかになっています。

サンゴは静岡県でもみられるのか？

意外と静岡県民の皆さんには知られていないようですが、静岡県の沿岸にもサンゴが生息しています。静岡県は、千葉県と並んで、太平洋側でのサンゴ分布の北限域に位置しており、1990年代には、分布北限域の中で最大といわれたサンゴ群集がありました。そのサンゴ群集がみられたのは奥駿河湾の内浦湾です。サンゴ群集は、エダミドリイシというサンゴにより形成されており、5000㎡ほどの広さをもっていました。現在、そのサンゴ群集は、低水温やガンガゼの食害などの影響を受けて、もとの数%程度に縮小しました。しかし、継続した保全活動により、少しずつ面積を広げています。

内浦湾では2020年に伊豆半島で初記録のサンゴが2種、報告されています。この報告以前は、和歌山県沿岸までしか分布が確認されていなかった種です。また、西伊豆の沿岸域では、サンゴの種類や量が増えつつあります。

サンゴを守るために何ができるのか？

減少しつつあるサンゴを守るために、まず、私たちにできることは、『サンゴを正しく知る』ことです。ここに書かれていることは、サンゴについての情報のほんの一部です。図書館などでサンゴに関する本や図鑑などを開いてみてください。また、サンゴに関する体験型の学習会などに参加するのも良いかもしれません。加えて、サンゴを知る上で、とても重要なのは、海にいるサンゴを『自分の目で観察する』ことです。本や写真、映像などから得られる知識とは違った学びがきっとあります。

私たちに他にもできることがあります。それは、サンゴのことを知った上で、何ができるのかを『考え、実行する』ことです。例えば、大規模なサンゴの白化現象の発生頻度の増加は、地球温暖化と関係しています。地球温暖化を抑えるには、二酸化炭素の排出量をゼロにしておく必要があります。そのために、私たちに何ができるのでしょうか？また、ここまで紹介していませんでしたが、マイクロプラスチックがサンゴに悪影響を与える可能性を多くの研究が示しています。海洋に浮遊するマイクロプラスチックを減らすために、私たちに何ができるのでしょうか？思いついたことを一つずつ、実行してみてください。そうすることがサンゴを守るにつながっていきます。



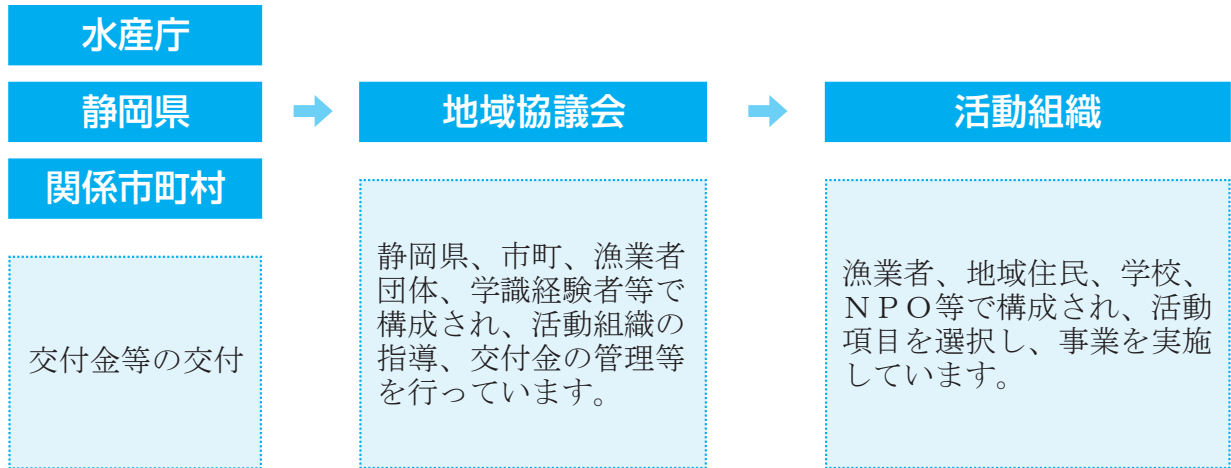
今年の夏は、海に行き、サンゴを観察してみませんか？

東海大学海洋学部水産学科 准教授 中村雅子

静岡県水産多面的機能発揮対策事業の仕組み

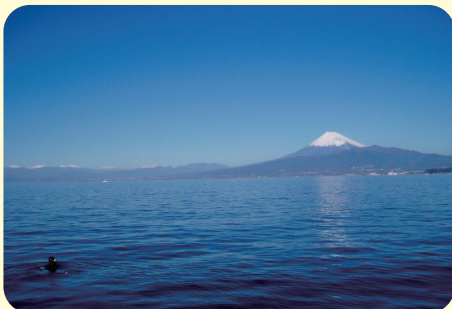
水産業・漁村は、国民に安全な新鮮な水産物を安定的に提供する役割に加え、藻場や干潟の保全等の多面的機能を有していますが、漁村人口の減少・漁業者の高齢化等により、多面的機能発揮に支障が生じています。

環境・生態系の維持や回復、安心して活動できる海域の確保など、漁業者等が行う水産業・漁村の多面的機能の発揮に資する地域の活動を支援しています。



静岡県水産多面的機能発揮対策協議会 会員名簿

- 会 長 静岡県漁業協同組合連合会 代表理事専務
- 副会長 静岡県 水産振興課長
- 監 事 御前崎市 農林水産課長
- 会 員 南伊豆町 地域整備課長
- 会 員 沼津市 水産海浜課長
- 会 員 吉田町 産業課長
- 会 員 牧之原市 農林水産課長
- 会 員 静岡県水産・海洋技術研究所長



静岡県水産多面的機能発揮対策協議会

会長 鈴木 博(静岡県漁業協同組合連合会代表理事専務)

事務局

静岡県漁業協同組合連合会

〒420-8666 静岡市葵区追手町9-18

TEL 054-254-6011 FAX 054-253-9343